

大型哺乳動物の骨から地域的な個体変異を学ぶ —ニホンツキノワグマの頭骨の計測のまとめ—

群馬県立太田女子高等学校

渋谷 奏里・園田 萌・関口 灯・印東 綾乃・川村 緋夏
・佐藤 彩子・岩崎 聖未・金井 萌乃・小暮 万里奈・須藤 満理奈

1 はじめに

研究をはじめたきっかけは今年のサイエンス・パートナーシップ・プロジェクトにて、群馬県自然史博物館に収蔵されているニホンツキノワグマの標本の頭骨、上顎、下顎、歯の大きさを計測したことである。その時に得られたデータをもとに、多くの標本で破損や紛失を免れ、測定値を得ることができた項目についてさまざまな分析を行い、群馬県付近に生息するツキノワグマの特徴について考察したいと考えた。

また、志村編(2002)によると、ニホンツキノワグマ(学名 *Ursus thibetanus japonicus*)とは哺乳綱 ネコ目(食肉目)クマ科の生物である。体長 140cm 尾長約 8cm 体重 80~150kg ほどで本州、四国、九州に分布し、アジア東部に分布するツキノワグマ(ヒマラヤグマ)の亜種とされる。

2 研究方法

群馬県付近の地域約 30ヶ所で捕獲されたニホンツキノワグマ、総計 115 個体の標本の頭骨について、頭骨および下顎で 30箇所、歯で 31箇所の計測項目を設定し、ノギスを用いて長さを計測した。(図-1,2)

3 結果

標本の中でも、保存状態がよく、比較的多くの個体で計測を行う事ができた下顎骨と下顎骨の歯の、計 14項目のデータに用い、1つ1つの項目について、各個体の年齢と、その年齢の個体の測定値の平均値についての散布図を作成した。また、群馬県を大きく東西2エリアで分割した場合、南北2エリアで分割した場合、群馬県北部の山地の周辺エリア、群馬県南西部の山地の周辺エリア、その2つの山地の中間的地域エリアの3つに分割した場合の、合計3パターンで、各エリアにおける測定値の平均値の比較を行った。

4 考察

犬歯 Cb と臼歯 M1L については、年齢毎にばらつきが大きく一定の傾向を読みとることができなかった。また歯の計測項目については年齢によるばらつきや変化も少なく、性差も見られなかった。

下顎 2 と下顎 19 については、およそ 4 歳と 5 歳までは年齢とともに測定値が増加しているように見える。これは、体の成長によるものと思われる。また、性別による差も見られ

た。臼歯 M1D については、年齢とともに測定値が減少しているように見えるが、これは咀嚼によって歯が磨り減ったためではないかと考えられる。

地域ごとの比較については、どのようなパターンで地域を区切っても地域ごとの計測値の平均に差は見られなかった。

5 謝辞

本研究を進めるにあたり、群馬県自然史博物館の姉崎智子学芸員にはクマの生態についての指導、資料提供をしていただきました。ここに、感謝の意を表します。

6 図表・画像

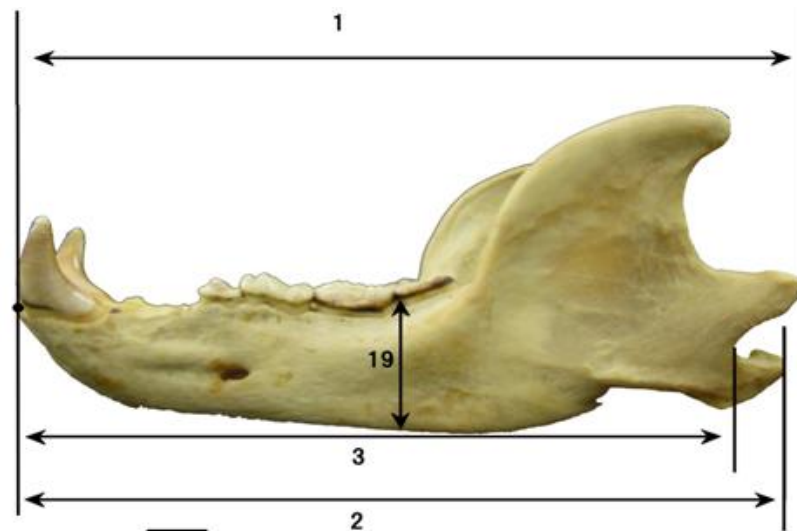


図 1—下顎の計測項目

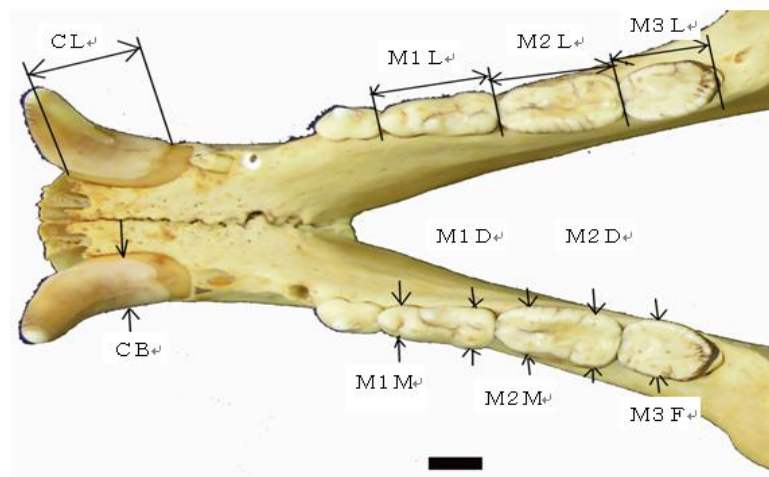


図 2—下顎の歯計測項目